詩集

絲綢之路

Silk Road

シルクロード詩篇

草野心平

silk road

詩集

絲綢之路

シルクロード詩篇

草野心平

絲綢之路　著者——草野心平　発行者——小田久郎　装幀者——亀倉雄策
発行所——株式会社思潮社　東京都新宿区市谷砂土原町三—十五　電話—二六七—八一四一（代表）
印刷・製本——凸版印刷株式会社
発行日——一九八五年十二月二十日　定価——三八〇〇円　1092-100186-3016

詩集［絲綢之路］目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

詩集［絲綢之路］前書き　八

タクラ・マカン　十四
思ひは猛烈な羊歯類のなかに　十六
大塩盤　十八
月　二十
ゆき　二十一
ガリビラ自伝　二十二
戈壁（ゴビ）　二十四
バガダ　二十七
ゴビの蛙　二十九
地球に初めて雪の降つた日のこと　三十三
新氷河時代　四十一
司徒喬の画集をめぐつて　四十三
天山　四十五
哈密（ハミ）　四十七
天　五十一
シュメール幻想　五十二
ジュンガリヤの春　五十四
Volga　五十五

サマルカンドの芥子　五十八
一本の道　六十
コフノトリ自身　六十二
烏魯木斉の満月　六十四
駱駝　六十五
天の居酒屋で　六十六
蛙　六十七
シルクロード　六十九
天山遠望　七十二
サマーラの塔　七十四
幻の洞窟　七十五
天からの戈壁　七十八
トルファンの干葡萄　八十
ゴビドの死　八十二
幻の恐龍　八十五
とてつもなく大きな動物　八十七
哈密　八十九
三つの満月　九十一
砂嵐　九十五
ロブノールのほとりにて　九十七

ペルシャのコフノトリ　九十九
幻想　百一
過保護のバラと対陣のバラ　百三
未知の峰岸敬三に　百六
龍巻　百八
電報　百十
植物の旅　百十二
エヴェレスト山巓の石　百十四
げえるッ葉と蛙たち　百十七
茫茫――或る叙事詩　百二十
夜光盃　百二十四
水はうまい　百二十六
桑の並木道　百二十七
機上のノート　百三十
遠景　百三十二
噂　百三十四
ロブノール　百三十六
異常天然　百三十九
性・性　百四十一
自問自答　百四十二

烏魯木斉の風呂　百四十四
夜景　百四十七

詩集「絲綢之路（シルクロード）」前書き

一九八五年五月十二日、今日は自分の八十二歳の誕生日である。約二ヶ月程前から私は詩集「絲綢之路」をまとめやうかと秘かに考えはじめてゐた。そして九分通りまとまったのである。

もう六十年以上も前のことになるが、私はたった一人の日本人として中国廣州嶺南大学（現中山大学）の学生として寄宿舎の屋根裏部屋に起居してゐた。貧之だったので海南島の植物標本づくりその他のアルバイトをしながら。

その頃思ったものだった。もしも黄河源流の探険隊が組織されることがあったら、その一員に自分も加えてもらい、科学の才のない自分はその沿河風景を詩にしたいものだと。

探険隊といふ大袈裟の組織でなくても、源流はその頃でも極く少数の専門家によって探険されてもゐただらうと思はれるが、何も知らない自分はそんな憧憬をもってゐた。

ところがその同じ自分がだんだん源流の峨峨よりも戈壁（ゴビ）やタクラマカンなどの茫漠にひかれるやうになった。このことはヘディンやスタイン・ブルジュワ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ルスキー等を読んだことの影響によるものだった。

もっとも黄河流域にしろ天山南北路にしろ、大きな意味での隣組であったし、いまもそうだ。ところでそれまで写真でなり見たことのない、無論行ったことのないタクラマカンを詩に書いたのは四十六年前の一九三九年のことであった。

初めて中国側のシルクロードの土を踏んだのは一九五六年（五三歳）の秋であった。そして中央亜細亜のウズベック界隈を独りでうろついたのは一九六八年（六五歳）の春だった。その間無経験の「タクラマカン」にはじまって現在まで言はばシルクロードものと呼んでもそう的の外れてゐない作品群も書きつゞけてゐるが、蛙や不盡山のやうに、それだけをまとめた詩集はない。だから蛙や不盡の詩人などのやうにシルクロードの詩人などと呼ばれることもなしに済んだ。

それらの作品群は次に列挙する詩集に分載された。

詩集「絶景」（一九四〇年刊）に一篇「日本沙漠」（一九四八年刊）に一篇「牡丹圏」（一九四八年刊）に三篇「定本蛙」から一篇「天」（一九五一年刊）に一篇「第四の蛙」（一九六四年刊）に三篇「マンモスの牙」（一九六六年刊）に三篇「こわれたオルガン」（一九六八年刊）に三篇「太陽は東からあがる」（一九七〇年刊）に四篇「侏羅紀の果ての昨今」（一九七一年刊）に四篇「四十八年ジッグザッグの」（一九七三年刊）に一篇「凹凸」（一九七四年刊）に二篇「全天」（一九七五年刊）に五篇「植物も動物」（一九七六年刊）に二篇「原音」（一九七七年刊）に一篇「乾坤」（一九七九年刊）に三篇「雲気」（一九八〇年刊）に四篇「玄玄」（一九八一年刊）に四篇「幻象」（一九八二年刊）に一篇「玄天」（一九八四年刊）に二篇「幻景」（一九八五年刊）に一篇等。そしてその他「新潮」「現代詩手帖」などに書き下して発表した作品が十篇、全部で六十篇ある。

この覚え書を書き終えてから近く催される自分の個展の字を二、三点仕上げやうとたくらんでゐたが、もう十七時過ぎになり疲れてもゐる。それに今日は大相撲五月場所の初日である。世界無類のはだかわざをテレビで見ながらOne Cup三・四杯の夕飲を初めやうと思ふ。

Ⅱ

今日は七月十六日、天山祭の当日である。天山文庫の界隈にはもう二百人以上の人々が集ってゐる筈。殊に今年は第二十回の天山祭である。だから余計盛りあがってゐるだらう。

ところで私自身は文庫からは遠く離れた東京武蔵野赤十字病院の四階の個室にゐる。そこでこの一文を書き足しはじめたのである。

この詩集を一応まとめたのは自分の誕生日だったが、それから十二日目に私は入院した。そしていつの間にか二ヶ月以上経ってしまった。その間、でも、未完・未発表の数篇もなんとかまとめあげた。「病室」での「シルクロード」なんて、妙ちきりんな取りあはせだと思ひながらも。

ところで天山祭も今年は第二十回になるのだが、自分が祭に出なかったのはハワイ大学で講義をしてゐたたった一回だけだった。

歴程フェスティヴァル「未来を祭れ」には各界の人々に出てもらふ二分間スピーチといふのがあるが、天山祭にはそれを上廻る一分間スピーチがある。

指名された友人が一分間ジャスト話すと、十三夜の池に臨時に造られた大櫓の上の大太鼓がダーンと鳴る。と同時にスピーチをした人は真竹でつくったグイ呑ミで波波日本酒をのまされる。飲まされる人は男であれ女であれ同じこと

だが、酒好きな人には御褒美であり、嫌ひの人には罰金みたいなものである。
福島県双葉郡川内村といふ阿武隈山脈のなかの過疎村に、県内や東京、その他方々から集まってくるといふのは一寸例外ではないだらうか。中国やドイツ、そしてギリシャの美人も。もう始ってゐるだらう踊りの輪にまじってゐるだらうか。

附記

①詩集の「前書き」としては脱線したが、もう少し補足したいことがある。詩集の題は「絲綢之路」だが「Volga」とか「地球に初めて雪が降った日のこと」とかその他、シルクロードと直接関連のない詩が十数篇はあると思ふ。それらをもここに収録したいと思ったことは、なんとなくシルクロードと、直接ではなくとも、脈々関連もあると思ったからである。
また一般にシルクロードと言はれてゐるものを「絲綢之路（シルクロード）」としたのは、秋津五光の自分の家の便所にはりつけてある地図が「絲綢之路」（シルクロード）となってゐるからの個人的馴染からのもので他意はない。
②恰度百二十三日の入院だったので、そこでテを入れ未完の十篇もなんとかカタチをなした感じがする。そして私自身のなかにぶくぶくしてゐた一種憧憬の毒血を吐きだしおえた感じもする。（どうだか分らない。分らない。）

（一九八五・八・四）

シルクロード詩篇

タクラ・マカン

ガジヤアタマ。
蕪雑バウバウノ荒地ノ向ウノ見エナイトコマデ。
ムンムン暑サノイキレデアル。
空ヲ水ニシタイ欲望ノナカデ萎レユク草共ガ未来ヲ知リ土カラムシロ抜ケ出シタイ。
空ハ高クアクマデモ高ク。
エレキ駆ケメグリ風ハナイ。
ヤガテ黒イ夜ハ地平カラ沸キ。
北斗ノ杓子ガ仰向ケニナツテ天ヲ汲ム午前三時ニ。
疲レ果テ眠ル草ト花トニ幻視ハ粉ニナツテフリカカリソシテ神ハ言フノデアル。
オ休ミマブタヲトヂテ。
眠レズニ眠ル疲レノ底デ。
蝶ヲ下サイソンナ言葉ナドアリハシナイ草ヤ花ノ万万無量ヨ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com